

宿泊型自然体験学習が小学5年生の学校生活スキルに及ぼす影響

安藤 光佑 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード：宿泊型自然体験学習 小学5年生 学校生活スキル

1. 序論

子どもたちの人間関係の希薄化が問題となっている今、「学校」という社会の中で、人とのつながりを築けない子どもや、環境に馴染めず不登校となる子どもが増加している。山口ら(2005)は学校生活を送る上では学校生活スキルが重要だと述べている。

現在、多くの小学校が宿泊型自然体験学習を取り入れ、非日常的な環境の中で、子どもの興味・関心を最大限に引き出し、意欲的な活動の中から個人の成長をはかり、子どもたちの学校生活の充実を目指している。

そこで本研究では、宿泊型自然体験学習(キャンプ)が小学5年生の学校生活スキルに及ぼす影響を調査し、また、実施形態の異なる2校を参考に、その違いに着目した。

2. 研究方法

【対象者】実験群1：5泊6日でキャンプを行うD小学校の小学5年生約39名(有効回答数92%)

実験群2：4泊5日でキャンプを行うM小学校の小学5年生約58人(有効回答数93%)。

【調査内容】小学生版学校生活スキル尺度(山口, 2005)7因子43項目の中から、キャンプ効果として期待できる集団活動スキル、課題遂行スキル、自己学習スキル、コミュニケーションスキルの4因子18項目に改良したものを担任用、生徒用に分け、キャンプ直前、直後、1ヶ月後にアンケートを行った。また事前アンケート(キャンプに向けて)を6月、7月の2回両校に行った。

3. 結果と考察

1) 学校生活スキル尺度の点数を集計し、平均値を学校別、因子別にそれぞれ集計した。また、平均値の差を見るため、調査時期と学校を要因とする2要因の分散分析を行った(図1)。その結果、D小学校において、キャンプ直前、直後に有意な向上が見られ、1ヶ月後にも向上が維持された。また、因子別で分析を行った結果、D小において集団活動スキル、課題遂行スキル、コミュニケーションスキルがキャンプ前後で有意に向上し、1ヶ月後にも維持された。また、M小においてもコミュニケーションスキルにおいてキャンプ前とキャンプ後に有意な向上が見られた。しかし、自己学習スキルにおいては2校共に有意な向上は見られなかった。D小の学校生活スキル向上の要因として、プログラム内容において非日常的な環境を活かし、児童たちのモチベーションを上げる工夫や、目標を掲げた活動を取り入れたことが考えられる。

一方、M小は、野外教育経験者が先生たちの中にいないことで、児童に適したプログラム内容や指導が難しかったことが考えられる。また、期間もD小に比べ1泊少なく、指導面でも、キャンプ2日目に先生たちが総入れ替えされたことで進め方が変わり、継続的、発展的な体験が望めず、児童たちにとって、戸惑いが出たのかもしれない。それらが、学校生活スキルの有意な向上に繋がらなかった要因ではないかと考えられる。

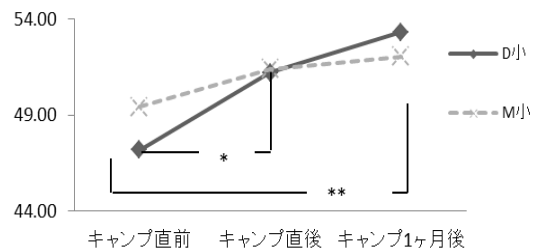


図1 学校生活スキルの得点推移 * $p<.05$, ** $p<.01$

2) 学校生活スキル得点の高得点・低得点別の分析の結果、低得点群においてのみ2校共に有意な向上が見られた。因子別ではD小の低得点群に集団活動スキル、課題遂行スキル、コミュニケーションスキルに有意な向上が見られ、一方、M小では課題遂行スキルのみ有意な向上が見られた。この結果から、2校共にプログラムが低得点者により適していたのではないかと考えられる。また、D小には低得点者が多かったことが、全体でも有意な向上が見られた要因であると考えられる。

4. まとめ

小学5年生の学校生活スキル向上にはキャンプは有効であるが、プログラムには児童に適した内容や指導、また、児童のモチベーションを上げる工夫が重要だと考えられる。また、キャンプという教育環境を活かすために、より不便な生活を取り入れ、クラスではなく班という小集団での活動、先生ではなく学生スタッフによる体験学習のサポートなどが学校生活スキル向上に有効であることがわかった。

引用文献

1) 山口豊一・飯田順子・石隈利紀(2005) 小学生の学校生活スキルに関する研究-学校生活スキル尺度(小学生版)の開発-学校心理学研究, 第5巻, 第1号, pp49-58